

1 主題設定の理由

(1) コミュニケーション能力とは

コミュニケーションとは、「人間が互いに意思・感情・思考を伝達し合うこと」や「自らの知識や経験、意思や意見、感情や気分を他の人間に対し伝達し、お互いがそれらのメッセージを共有し合うこと」(注1)などと定義されている。このことからコミュニケーション能力とは、自分の意見や気持ちを相手に分かりやすく伝えるとともに、相手の意見や気持ちを理解する能力であるととらえることができる。

近年、子供たちのコミュニケーション能力の低下が危惧されており、「コミュニケーション能力の育成を求める声が多い」との報告もある(注2)。静岡県でも「静岡県教育計画『人づくり』2010プラン後期計画2006～2010」において、幅広いコミュニケーション能力を育てることが教育課題として掲げられている。

(2) 言葉による表現の重要性とその実態

コミュニケーションの要素は、言葉、話しぶり、動作、ジェスチャー、相手との間の取り方など種々ある。

日本には「多くを語らず、察する」という文化があり、言葉以外の表現手段で伝えられる情報量が多いとされている。しかし、グローバル化が進む現在、自分の思いを言葉で表現する力が強く求められている。さらに、電子メール等の文字によるコミュニケーションの場も増え、言葉による表現力の重要性が高まっている。

子供たちに目を向けると、他から得た情報をそのまま使う、主語と述語がつかない、単語だけで話す、自分の意見ばかりを主張するなど、情報を相手にうまく伝えることができないことが少なくない。これらは言語能力の低下によるものもあるだろうが、根底に相手に分かってもらおうという意識が薄いことがあるのではないだろうか。

(3) 主題の設定

相手を意識することは、すべてのコミュニケーションの基本である。よりよいコミュニケーションをとるためには、「相手の立場や気持ちを理解した上での分かりやすい表現」が必要である。本研究では「相手を意識して表現できる子供」を育成したいと考え、表現手段の中心である“言葉”を取り上げた。

「相手を意識して表現できる子供」の育成には、相手の立場や気持ちを考えて表現する実体験が必要である。そして、実体験の場は異世代の人との交流活動が有効ではないかと考えた。交流活動では、交流が活発になるほど相手に対する関心が高まり、より相手の立場や気持ちに配慮した表現ができるようになると期待できる。また、交流相手を日ごろ接することの少ない異世代に求めることで、緊張感を伴った情報発信が行われ、より相手を意識した表現活動の場が実現すると考えた。

さらに、この交流活動に情報機器の活用を考えた。情報機器を使ったコミュニケーションでは、言葉に頼る部分が多く、対面時のコミュニケーションで多くを占める非言語による情報が失われている。したがって、発信者としては非言語部分を補う言葉による表現（より分かりやすい表現）が、受け手としては非言語部分が失われていることへの理解（相手の立場に立った理解）が求められる。対面時のコミュニケーションでは瞬時に情報伝達・情報理解が行われるが、情報機器を使ったコミュニケーションでは得た情報や伝達する情報を吟味する時間的な余裕がある。情報機器を使ったコミュニケーションの特性を知った上で、伝えたい情報を吟味する活動を重視することが、相手への理解を深め相手を意識することにつながると考えた。

また、情報機器を使った交流活動に情報モラル学習をタイムリーに組み合わせることで、情報モラルが実践につながる生きた知識として身に付き、より質の高い「相手意識」が育成できると考えた。

このように、情報機器を使った言葉による交流において、相手を意識して表現するという経験を積み重ねることで、どのようなコミュニケーションにおいても相手の気持ちや立場を意識して表現しようとする姿勢につながるのではないかと考えた。

2 研究の目的

相手を意識して表現できる子供を育成するために、情報機器を活用した交流活動の可能性を探る。

3 研究の方法

(1) 「情報活用の実践力」の現状と課題の把握

情報伝達に関する能力である「情報活用の実践力」について、中学生の実態を把握し、研究の目的を達成するための課題を明らかにする。そして、目指す生徒像を具体化する。

(2) 活発な交流を図るための手だての工夫

交流活動の場となるコミュニティサイトを作成するとともに、交流相手への協力依頼を工夫し、積極的な働き掛けをする。

(3) 交流活動と情報モラル学習の実践

所属校の中学2年生を対象に、地域住民、地域の小学校6年生との交流活動を展開する。並行して、交流活動を支える情報モラルの授業を行う。

(4) 実践の分析

交流活動における生徒の表現の内容や表現に対する意識の変容などを分析し、交流活動や情報モラルの授業実践の効果をまとめる。

4 研究の内容

(1) 「情報活用の実践力」の現状と課題の把握

所属校で行った調査から、多くの生徒が日常的にコンピュータを使用していること、

コンピュータを使うことが好きであることが分かった。このことから、情報機器を使った交流活動は、身近で好きなコンピュータを使うため、意欲的な取組が期待できた。

同調査から、生徒のコンピュータの使用目的は、インターネット検索とゲームが圧倒的に多く、発信（掲示板、ホームページ作成等）に利用している生徒は1割程度にすぎないことも分かった。情報機器を使ったコミュニケーションには、「いつでも、どこでも、だれとでも」といった利点があり、社会でも必須なものとなりつつある。発信経験の少ない生徒にとって、情報機器による発信・受信を経験することは、情報化社会を生き抜くための大切な力になる。

情報機器を使って情報を発信する際の意識調査では、「自分の個人情報をもらさない」についての意識の高さに比べ、他人や相手に配慮する項目で意識が低いことが分かった（資料1）。自分を守ることへの意識は高いが、相手を思いやる意識が低いと言える。

この結果から、よりよいコミュニケーションをとるためには「相手の気持ちや立場を理解する」ことが課題であることが明確になった。

「相手を意識した表現」について、「相手の気持ちや立場の理解」という視点から要素を洗い出し、目指す生徒像を、誤解のない表現を心がける、大げさな表現をしない、嘘を書かない、悪口を書かない、とした。そして、これらの項目についての意識の高まりを、評価・分析した。

【資料1】情報を発信するときに何に気をつけることができますか。

発信時の留意点	
誤解がない表現を心がける	4.1
大げさな表現をしない	3.9
嘘を書かない	3.9
悪口を書かない	4.1
他人の名前を出さない	4.2
自分の個人情報をもらさない	4.6

注)18年7月所属中学校2年生36名対象の調査から
は5点満点で自己採点したものの平均

(2) 活発な交流を図るための手だての工夫

ア 交流相手の選定

交流相手として、保護者を含む地域住民と地域の小学校6年生を選定した。

地域住民の学校への関心は高く、日頃の教育活動にも大変協力的である。したがって、この交流にも子供の育成という視点から積極的な参加が期待できた。また、世代が異なるため緊張感を伴った情報発信がなされ、より相手を意識した表現活動の場が実現すると考えた。保護者対象の調査からは、約6割が週に1回はインターネットを活用するという結果が得られ、交流が可能と判断した。

小学校6年生が中学校生活について知りたいことはたくさんある。中学校2年生も、来年度同じ仲間として迎える6年生に対して教えたことは多くあり、活発な交流が期待できた。また、年下の小学生に対し情報を正確に分かりやすく伝えるという、相手を意識した発信も期待できた。小学校6年生に行った調査からは、全員がコンピュータを使うことが好きで、文字の入力やインターネット検索の経験もあることが分かり、交流が可能と判断した。

イ コミュニティサイトの作成

情報機器を使った交流を進める場として、コミュニティサイト「交流の部屋」を作成した（資料2）。サイトの作成には、国立情報学研究所が開発したNetCommons（注

3)を活用した。その利点として、内容の更新が容易である(ファイル転送の必要がない)こと、会員制のWebサイトが簡単にできること、モジュールと呼ばれる多様な機能(日誌、掲示板、アルバム、カレンダー等)があり、ねらいに即したコミュニティ環境を選択できることなどがある。

地域住民との交流では、記事の公開に管理者の承認が必要であったり、生徒と地域住民の区別ができたりすることから、日誌機能を利用した。

小学校6年生との交流では、交流の流れを一目で見ることができる掲示板機能を利用した。そして、このページの閲覧者を小学校6年生と中学校2年生に限定した。部外者からの不適切な発言から子供たちを守ること、部外者に閲覧されないという安心感の中でも相手を意識した適切な表現ができることをねらった。

「交流の部屋」の閲覧には、IDとパスワードの入力を必要とする。中学校2年生には、交流への意欲化と発信への責任感を持たせるため、個々にIDとパスワードを持たせた。交流相手である地域住民には一つの共通のもの、小学校6年生にはグループごとのものを持たせた。

また、当コミュニティサイトへの関心を高めるために、保護者の同意を得て行事の写真や生徒の作品なども掲載した。さらに、学校ホームページに当コミュニティサイトへのリンクを貼り、学校ホームページからも容易にアクセスできるようにした。

【資料2】コミュニティサイト「交流の部屋」
トップページ

地域との交流のページ(日誌機能)

2006/07/07	筋肉	保健体育
------------	----	------

僕は総合学習で、浜松大学に行きました。筋肉の種類、役目などいろいろなことが分かりました。トレーニングやストレッチの方法も教えてくれたので、これから実行していきたいです。いい体験になりました。

記入者(○) コメント(2) トラックバック(0)

生徒のハンドルネーム 地域から寄せられた返事の教

生徒の作品のページ

表紙	内容	備考
	紙粘土で作りました。本物そっくりなリゴ、思わずなでたくなるネコ。力作揃いです！	枚数:7 登録者:2006年 11月14日
	はみ出した顔。今年度の最初の作品です。1時間で仕上げました。	枚数:4 登録者:2006年 10月05日
	グラデーションのトレーニング。グラデーション技法を使ったデザインです。	枚数:2 登録者:2006年 10月05日

小学生との交流のページ(掲示板機能)

2-2	四ようこそ校中へ。(0件)の返
6-2	自己紹介(0件)の返
6-2	中学校生活についての質問
2-2	質問の返事です。(0件)の返

中学でおもしろいことといえば、やはり行事でしょうか。○小学校より準備とかが多くなって、放課後残ってやったりします。でも、準備が少い分、成り立ちこそが感動はへさいます。自分たちで作ったような感じなのでよいにね。でも、毎日が充実するので、毎日楽しいです。制服を初めて着たときは、すごく誇らしくなりました。まあ人によっては最初制服がうっさいかも。でも、気持ちが切り替わります。

■標語

2006/11/14	心の健康標語
------------	--------

朝食を食べよう
早寝早起き 大切だ
1日の 始めが良いと 後も良くなる
朝食は 一日のエネルギー
いっぱい食べて いっぱい動こう
早寝早起きをしよう
心の中は みんなの笑顔で つつまれている
あいさつを しっかりすれば うれしいな
一日三食 がんばろう
友達が そばにいるから 頑張れる
笑顔であいさつ交わせば みんな幸せ
朝食は 栄養バランス 大切に
毎日 早寝早起き 元気モロモロ
一日三食食べよう
一日に 三食食べれば 異常なし
家にもならず 外で運動

ウ 交流相手への働き掛け

交流相手に対し、交流の拡大や活発化を図るため以下の働き掛けを行った。

(ア) 協力依頼書、操作マニュアルの配布

協力依頼書を学区の各地区で回覧し、各戸に操作マニュアルを配布した。

(イ) 保護者会での協力依頼

保護者会の際、依頼書と操作マニュアルを配布しながらこの活動の意義を知らせ、交流への参加を呼び掛けた。

(ウ) 学校行事を通しての協力依頼

学校行事の際、来賓に依頼書と操作マニュアルを配布して協力を呼び掛けた。さらに、放送や掲示物を使って来場者全体に呼び掛けた。

(エ) 学校便りを活用しての協力依頼

学校便りを活用して、交流の様子を知らせたり交流への参加を呼び掛けたりした。

(オ) その他関係者への依頼

総合的な学習の時間の活動で協力していただいた方に、「交流の部屋」を紹介する文書を配布した。

(3) 交流活動と情報モラル学習の実践

ア 実践の場

情報化社会を生きる子供たちに身に付けるべき情報活用能力には、「情報活用の実践力」「情報の科学的な理解」「情報社会に参画する態度」の3観点がある。そのうちの「情報活用の実践力」は、コミュニケーション能力と通じるものがある（資料3）。

中学校の情報教育は、技術・家庭科で培われる基礎的な知識や技能に基づき、教育活動全体を通じて、情報活用能力をバランスよく、総合的に育成することを目標としている（注4）。技術・家庭科で扱う「情報の科学的な理解」や「情報社会に参画する態度」を、実際のコミュニケーションにも生かせる“生きた知識”とするためには、各教科等や総合的な学習の時間における「情報活用の実践力」の育成が重要になる。そこで、技術・家庭科と連携しながら、総合的な学習の時間、学級活動を実践の場として交流活動を進めた（資料4）。

交流活動に必要な機器操作については、技術・家庭科の「情報とコンピュータ」（技術分野）における「情報を発信して活用しよう」での発信体験の中で、その習得を図った。地域との交流とそれに関する情報モラル学習については、総合的な学習の時間の探究活動において、そのねらい「問題解決に主体的、創造的に取り組む」に迫るための時間として位置づけた。学習指導要領にも、「外部に活動の状況や成果等を公表し、地域住民から協力、反応を得ることにより、生徒も社会とのかかわりを実感し、

【資料3】情報活用の実践力

「情報活用の実践力」の定義

「課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などをふまえて発信・伝達する能力」
新「情報教育に関する手引」より

「情報活用の実践力」にある「表現力」の定義

「受け手、情報の特性等を念頭に置いた表現法選択のための知識や、選択した表現法により実際に表現を行うための技能（自分が発信する情報の表現形態を受け手の立場に立って検証する技能等）」
「情報教育に係わる学習活動の具体的展開について」より

学習活動の達成感が得られ、真の成果となる」とあり、総合的な学習の時間の充実につながると期待した。また、小学生との交流とそれに関する情報モラル学習については、学級活動の「自己及び他者の個性の理解と尊重」「望ましい人間関係の確立」(学習指導要領より)を目指す活動として位置づけた。

【資料4】教科等のねらいと交流活動に関する授業とのかかわり

	総合的な学習の時間	技術・家庭科	学級活動
目標	「感じて動き、自分らしく表現できる生徒自ら課題を見付け追究していく活動を通して、問題解決の能力を育成するとともに、学習内容をまとめ発表する表現力を高める。	(情報とコンピュータ)実践的・体験的活動を通して、コンピュータ活用に関する基礎的な知識と技術を習得するとともに、それらを適切に活用する能力と態度を育てる。	自主的・実践的な活動の中で、集団の一員としての自覚を深め、協力しよりよい生活を作り上げようとする態度を育て、自治的活動ができる生徒の育成を目指す。
(関連分野とそのねらい) (関連内容に網掛け)	「テーマ追究の活動(18時間)」 自ら学び自ら考え、問題を解決することができる。 情報の集め方、調べ方などの学び方やものの考え方を身に付け、問題解決に向けて主体的、創造的に取り組むことができる。	「自分が作った情報を発信して活用しよう(6時間)」 情報の伝達方法の特徴と利用方法を理解する。 情報を収集、判断、処理し、表現や発信ができる。	「個人、社会の一員としての在り方」 青年期の不安や悩みとその理解 自己及び他者の個性の理解と尊重 社会の一員としての自覚と責任 男女相互の理解と協力 望ましい人間関係の確立 ボランティア活動の意義の理解
(数字は授業実践の順番)	情報を発信するために 例文の添削を通して情報モラルの必要性を理解し、地域への発信に適した文や画像を考える。 表現の工夫 受け手の立場で記事を振り返る活動を通して、受け手の関心を引くための表現を考える。	情報を発信しよう 日誌機能の特徴や操作方法を知り、自分の記事を「交流の部屋」に登録する。 掲示板の操作方法 電子掲示板の特徴や操作方法を知り、小学生への自己紹介文を「小・中交流の部屋」に登録する。	相手を意識した表現とは 小学生に部活動を紹介する文を作る活動を通して、小学生が相手の場合の表現について考える。 小学生に掲示板の使い方を教えよう 小学生に電子掲示板の操作方法を教える活動を通して、以降の交流活動への意欲を高める。

イ 地域住民との交流活動

研究者の話や先進校等の視察(注5)から、情報機器を使った交流活動では、情報機器の操作技能よりも交流そのものに目的意識が持てることが重要であると分かった。そこで、地域住民との交流の目的を「総合的な学習の時間での追究活動の様子や分かったことを発信して、地域住民からの意見や感想を学習に生かす」とした。

初期の段階では発信作業に慣れていないこともあり、総合的な学習の時間内に発信時間を設けた。事前の情報モラル学習で作ったチェックリストを使い、友達間で発信内容を吟味する時間を持った(資料5)。

【資料5】チェックリストを使って互いの文を確認し合う



発信操作や発信に際しての留意点に慣れるにしたがい、時間を設定せず、確認も各自に任せて自由に発信できるようにした。ただし、ホームページ管理者の承認を受けてから公開されるシステムを採用した。

ウ 小学生との交流活動

中学生側の交流の目的を、「来年入学してくる6年生からの質問に答えて、中学校の良いところを知ってもらい、小学生の中学入学に対する不安を取り除く」とした。

まず、対面交流で中学生が小学生に操作方法を教える時間を持った(資料4の)。この時間は、交流活動全体を通した唯一の対面交流であり、そのねらいを、

- ・ 一対一で活動し、以降の交流で相手をより強く意識する。
- ・ 以降の交流で言葉を大切にするために、中学生は小学生に言葉のみで操作方法を伝えることに挑戦し、言葉だけで相手に伝えることの難しさを実感する。

とした。

また、この交流は記名制とし、自分の発信に対してより強い責任感を持つことを期待した。さらに、不適切な書き込みを避けるため、常に教員が掲示板をチェックし素早く対応できるようにした。


エ 交流活動を支える情報モラル学習

交流活動と並行して、相手を意識して表現するための情報モラルの授業を行った。

(ア) 情報を発信するために (資料4 -)

不適切な表現がある例文の添削を通して情報発信時の留意点を考え、チェックリストを作成する活動を展開した。まために、事前に考えてきた文をチェックリストにしたがって見直しをする時間、友達間で確認し合う時間を設けた (資料6)。

【資料6】情報発信における情報モラルを育成する授業 指導案 (抜粋)

学 習 活 動 (1時間扱い)	支援・留意点
家庭学習：総合学習の活動内容や分かったことなどについて、HPにのせる記事の案を考えてくる。 活動の目的「総合的な学習の時間の様子をHPに公開し、いろいろな人に見てもらおう。」の確認 ・ 地域の人に知ってもらい、文化祭にも来てもらう。 ・ 地域の人々の知恵を貸してもらおう。 ・ 情報発信のルールやマナーを身に付ける。 『交流の部屋』を確認する (プロジェクターで映し出す)	<準備物> インターネットにつながったPC、プロジェクター、スクリーン ・ 多くの人と知識を共有できるというインターネットの利便性に触れる。
地域の人に発信するときに、どんなことに気を付けたらいいだろうか。	
不適切な表現がある例文を添削する (プロジェクターで映し出す) ・ 「個人名が入っている。」 ・ 「言葉遣いが悪い。」 ・ 「文が長すぎる。」 ・ 「一般的な言葉ではない。」 ・ 「失礼な表現だ。」 ・ 「著作権を侵害している。」 ・ 「写真に許可が欲しい。」	
発信するときに気を付けることについて話し合い、チェックリストを作る。 ・ 人をいやな気持ちにさせることは書かない。 ・ 名前・写真などの個人情報のをせない。 ・ 嘘や大げさな表現はしない。 ・ 著作権を侵害しない。 ・ だれにでも分かる表現にする。 ・ 誤解のないようにする。	・ 必要に応じて事例 (注) を紹介する。 ・ 不特定多数が見ることを意識させる。(ユニバーサルデザイン、悪用されない内容)
情報モラルが必要な理由をまとめる。 誤解を生じやすい。 完全回収が不可能である。 無責任な行動に陥りやすい。 罪悪感を実感しにくい。 不法行為の危険性がある。 <div style="display: inline-block; vertical-align: middle; margin-left: 10px;"> } インターネットを使うときは、普段よりもっとモラルに気を付けなくてはいけないんだ。 </div>	
自分が考えてきた文章を見直し、3～4人のグループで確認し合う。 なぜ、こんなに何回も確認するのか。 ・ 公開する前に何度もチェックし、ミスをなくす。 ・ 一度ネット上に公開した情報は、完全に回収することはできないから。	

注) 「ネット社会の歩き方」 (<http://www.cec.or.jp/net-walk/>)

(イ) 表現の工夫 (資料4 -)

最初の発信から2週間後に、「興味を引くための表現」についての授業を行った。前回の発信で、受け手への呼び掛けが入った文、具体的な内容で受け手の関心を引いた文を紹介した。そして、受け手の立場で記事を振り返ることで、「相手を意識した表現」についての意識が高まることを期待した。

(ウ) 相手を意識した表現とは(資料4 -)

小学生との交流に先立った授業で、例文を小学生の立場になって読み、修正をした。その後、小学生は何を知りたいかを考えながら、部活動について小学生に説明する文を作成した。

(I) 便りによる働き掛け

授業で扱えなかったことや交流の過程で指導が必要になったことについて、便りを通じて働き掛けた(資料7)。

(4) 実践の分析

ア 交流相手とコミュニティサイト

地域住民との交流では、活発な交流を願って様々な働き掛けを行ったが、参加者を増やすことは難しかった(資料8)。交流活動後の保護者アンケートやアクセス数と書き込み数の比較から、閲覧はするが書き込みをしない場合が多いことも分かった。その理由として、「操作方法が難しい」「書き込もうと思わなかった」が挙げられた。「私の年代ですと書き込みをすることも大変です」との意見もあり、操作が難しかったことに合わせて、自分の思いを文章にすること、その文章を広く公開することに対して抵抗があったことがうかがえる。

【資料7】便りによる働き掛け

【資料8】『交流の部屋』へのアクセス数の推移(週ごと)



一方の生徒は、ほとんどが自力で記事の登録ができ操作上の障害は小さかったと思われる(資料9)。また、管理者にとっても管理が容易であった。

地域住民との情報機器を使った交流では、環境整備と交流のきっかけ作りが大切になると考える。前者は操作面

【資料9】『交流の部屋』の操作について

操作内容	簡単にできた	難しかったができた	分からなかった	やる機会がなかった
ユーザ名等を覚える	47	44	6	3
ユーザ名等を入力する	59	35	0	6
見たいページを開く	62	32	0	6
記事を探す	29	62	3	6
文章を打つ	71	24	3	3
文字飾りをする	24	32	26	18
図や写真などを載せる	6	12	38	44

(%)
注)18年11月に所属中学校2年生36名対象に調査

でより抵抗の少ないコミュニティサイトの作成、後者は親子で一緒に入力する場やアドバイザーがついて入力練習をする場の設定(コンピュータ教室の開催等)である。

小学生が相手の交流では、対面交流後の2週間の書き込みが、中学生(個人)36回

に対し、小学生（グループ）が23回であるなど活発な交流がなされ、小学生の操作上での障害は小さかったと思われる。当コミュニティサイトは、小学生との交流において、有効であったと言える。

イ 交流活動の実践の場

基本的な情報モラルや機器操作の学習の場として、技術・家庭科や学級活動、総合的な学習の時間を活用したが、その後の交流活動については各自で時間を見つけて更新するようにした。その結果、休み時間や家庭から更新作業をする生徒が出てきた。しかし、時間を設けていたときに比べ全体の更新数は減ってしまった。生徒のアンケートからは、更新しなかった理由として「時間がなかった」や「コンピュータ室が開いていなかった」などが挙げられた。また、2回目の更新後に夏季休業期間に入り、生徒の関心・意欲が低下したことも予想される。

交流活動では、連続的に情報交換を行うことで活発化が促されるため、交流を行う時期について長期休業や学校行事を踏まえて計画する必要がある。

また、情報機器を使った交流では、情報機器が日常的に使える環境にあることが大きな条件になる。発信したいときにコンピュータが身近にある環境が大切で、教室や廊下に生徒が常時使えるコンピュータを配置するなどの環境整備が課題である。

ウ 地域住民との交流

資料10に、ある生徒の発信内容の変容を示した。始めは活動内容の羅列であって、具体的内容がないものであった。しかし、更新を重ねる度に発信内容がより具体的になり、受け手の関心を引くものに変容していったことが分かる。

実践後の調査「記事を書くときの気持ち」(資料11)では、「興味を引くように～」や「目上の人と話す感じで～」などが挙げられ、相手を意識した様子が見える。具体的には、タイトルや文字を工夫したり、意外性のある話題を取り上げたりなどの表現がなされ、相手を意識することで表現の工夫が生まれたと言える。相手が大人であるため、失礼にならないように緊張感を持って記事を書いていたことも分かった。このように、地域住民との交流は、相手意識を高めるのに有効だったと言える。

この交流で生徒は、交流そのものや返事を学習に生かすことに楽しみを感じていた。返事が総合的な学習の時間の追究に役立つとする生徒も多かった。また、記事を書いたきっかけとして「返事が欲しいから」や「返事が来たから」が挙げられた。大人

【資料10】地域との交流での記事の変容例

2006/07/07 エジプトの歴史 社会 東立図書館へ行った。本を調べた。弁当を食べた。バスで静岡駅へ行った。電車でY君たちと会った。	2006/07/20 エジプトの歴史 社会 ぼくは、一日フロンティア学習で静岡県立中央図書館へ行きました。図書館ではエジプトの本があまり見つからず、すこしまりました。しかし何冊もあったのでそれを借りてきました。内容は、少し難しかったけど勉強がていどでした。
2006/10/05 エジプトの歴史 社会 ぼくは、エジプトの歴史について調べています。僕の調べているエジプトの歴史は、ピラミッドの構造はどのようになっているか…ヒエログリフの事などを調べています。エジプトの歴史は難しいけど、がんばって調べています。エジプトのいい情報を知っている人は書き込んでくださいね。	

【資料11】地域住民への記事を書くときの気持ち（多数意見を抜粋）

相手が誰だか分からなく、丁寧、慎重になった。言葉づかいに気をつけた。 目上の人と話す感じで書いた。 大人向けの文になるように気をつけた。 相手にちゃんと分かりやすくした。 相手の悪口を書かないようにした。 一番分かって欲しいことを赤など色を変えた。 コメントを書いてもらえるように工夫した。 興味を引くようにおもしろい話題にした。 意見が来るかなあと思った。 コメントが来て返事を書くことがうれしかった。 コメントが来て、調べることが増えて楽しかった。
--

に記事を読んでもらえることが励みになっており、その反応が活動を支えていたと言える。今回のように少ない返事でも、生徒の表現意欲は大きく喚起され、得るものも大きかったと思われる。活発な交流が実現すれば、生徒を大きく成長させることができるであろう。

エ 小学生との交流

最初の対面交流は、和やかな雰囲気の中で進められた。授業後の中学生の感想から、言葉だけで伝えることに難しさを感じながらも、時間内でしっかり教えねばならないという責任感と、相手は下級生で思いやりを持って接しなくてはならないという思いを持ったことが分かった。

情報機器を使った交流では、小学生から寄せられた質問（部活動、学習内容、通学方法などに関する）に中学生が答えたのだが、6年生が抱く中学校への不安を解消しようとするもの、小学生の思いをくみ取ろうとするものなど、相手を思いやった表現が多く見られた（資料12）。

実践後の調査「記事を書くときの気持ち」（資料13）では、「知っている相手で書きやすかった」の意見が多く、実際に書き込んでいる姿を見ても楽しそうであった。対面交流を通し相手の顔が分かっており、安心して交流ができたと考えられる。また、「易しい文章」や「分かりやすい」などの記述から、相手が年下であることを強く意識していたことも分かった。

以上から、相手を思いやるというより深い相手意識を持たせるために、小学生との交流活動は有効だったと言える。特に、年下の相手との交流では、対面交流と情報機器を使った交流とを効果的に組み合わせることで、一層の相手意識を喚起するとともに、意欲的な交流が可能になると考えられる。

オ 情報モラル学習

資料4の「情報を発信するために」の学習は、個人情報や固有名詞、相手に分かりにくい表現などについて扱ったものである。学習のまとめに、予め考えてきた文章の添削を行ったが、初めての発信に向けて緊張感をもって添削をしている様子が見えた。長い文を短くしたり、一般的ではない言葉を言い換えたり、言葉遣いを丁寧にしたなどの表れが見られた（資料14）。その後の2回目の発信では修正点も減り、自分の作った文章を受け手の立場で見直すことの大切さ、その視点についてへの理解が深まってきたことが分かった。

【資料12】小学生との交流例

2-6	こんにちは！！(0件)(0票)
こんにちは！！ 中学校のことについてわからないことや、不安なことがあったら、 どんどん質問してね☆	
2-8	質問に答えます(0件)(0票)
勉強は小学校に比べて結構難しくなるけど、 しっかり先生の話を聞いたり、真実に授業を受ければ 大丈夫ですよ(´▽`)!! 理科では食えない実験とかにも入ってくるけど 先生の話を協力すればとても楽しいですよw	
2-2	目 遠慮せずに(0件)(0票)
最近、うちも書き込みができなくなってるけど・・・ なるべくこまめに更新します。だから、どんどん書き込んでね！ そういえば、文化祭の練習とか小学校っしてののでしょうか？ 頑張ってくださいね。	

【資料13】小学生への記事を書くときの気持ち(多数意見を抜粋)

<p>年下の知っている相手で、書きやすかった。 小学生にも分かりやすいようにした。 易しい文章にした。 小さな子と話す感じで書いた。 しっかり教えようと思った。 返事や質問が来た時に答えるのが楽しかった。</p>
--

【資料14】生徒による文の添削例

<p>小笠原図書館で<u>たくさん</u>のいろいろな資料を使って民族衣装とは何かを調べ学習を<u>も</u>ました。私が調べる<u>大体</u>の<u>内容</u>がわかったので、とても役に立ちました。民族衣装には大きく5つの種類があって、それぞれ気候・風土によって種類が違うことを<u>初めて</u><u>始め</u>で<u>知り</u>ました。他にも、日本の衣装の歴史や世界の<u>さまざま</u>な<u>様々</u>の民族衣装などを調べました。</p>
--

注) 下線は追加部分を示す。

資料4の「表現の工夫」の学習では、地域住民から寄せられた返事や友達の工夫された発信文に刺激を受け、自分も返事がもらえるようにと、タイトルや内容、文字の色や大きさ、フォントなどの工夫をする生徒の姿が見られた。相手に不快感を与えないだけではなく、関心を引くという視点にも目が向いてきたことが分かった。

資料4の「相手を意識した表現とは」の学習では、6年生に部活動について伝える文を考える活動を通し、6年生の立場になるとは具体的にどういうことなのかを体験させることができた。この後の交流では、それが生きた表現が多数見られた。

基本的な情報モラルやマナーについては、特に心配される発信もなく、後半は友達間での記事のチェックも省略した。訂正を必要とする記事が書かれることはなく、記事を書く際の留意点が身に付いたと言えよう。

交流活動にかかわる情報モラル学習は、生徒にとって必要感のある学習であり、課題意識を強く持った主体的な学習が展開できる。その結果、実践につながる“生きた知識”として情報モラルを身に付けることが可能となった。

5 研究のまとめ

(1) 研究の成果

資料15の情報発信時の意識を交流前後で比較すると、ほとんどの項目で意識が高まっており、自分のことと同様に相手への配慮ができるようになったと言える。

さらに、「交流を通して学んだこと」や「交流が役立ちそうなこと」の調査では、分かりやすさや人との接し方について言及する生徒が多かった(資料16)。

全校生徒を対象に行った総合的な学習の時間を振り返る調査の「自分なりに工夫したこと」「自分が成長したこと」に対する回答では、分かりやすさや相手を意識することに関する記述の出現率が、1年生の50%、3年生の42%に対し、交流活動を行った2年生は58%と高かった。

以上から、この交流活動は「相手を意識して表現できる子供の育成」に有効だったのではないかと考えられる。

さらに、地域住民と小学生のように異なる相手との交流を同時に展開することで、相手に合わせるということがより明確に意識できたのではないかと考える。

【資料15】情報発信するときどんなことに気をつけましたか。

発信時の留意点	交流前	交流後	増減
誤解がない表現を心がけた	4.1	4.1	±0.0
大げさな表現をしないようにした	3.9	4.2	+0.3
嘘を書かないようにした	3.9	4.6	+0.7
悪口を書かないようにした	4.1	4.7	+0.6
他人の名前を出さないようにした	4.2	4.5	+0.3
自分の個人情報をもらさないようにした	4.6	4.5	-0.1

注) 18年7・11月所属中学校2年生36名対象の調査数字は、5点満点で自己採点したものの平均

【資料16】交流活動後のアンケート(記述分抜粋)

<交流を通して学んだこと>
 誰が見ても分かりやすい文章を書くことが大切ということ。
 分かりやすく人に伝えること、分かりやすい表現。
 人に分かりやすく伝えるということは難しいこと。
 悪口などに気をつけること。
 ネットを利用するときのマナー。
 言葉遣い、誤解のない表現、悪口に気をつけること。
 HPを使って地域の人と交流ができるということ。
 人に聞いたりすると自分の知らないことが分かるということ。
 地域の人は親切で、いろいろなことを知っているということ。
 <この経験が役立ちそうなこと>
 パソコンなどを使うとき、分かりやすく伝えるようにする。
 人との接し方に気をつけたい(話すとき、説明するとき)、
 交流を深めたい。
 友達やクラスメートに悪口を言わなくなると思う。
 マナーを守ってパソコンを使おうと思った。
 来年の総合的な学習の時間のまとめや発表。

注)18年11月所属中学校2年生対象の調査から

地域住民が相手の交流では、緊張感を持ちながら自分の思いを分かってもらうための表現の工夫がなされ、小学生が相手の交流では、相手の思いをくみ取り相手の望みに応えようと努力している様子があった。

本研究は、「相手を意識して表現できる」ことを目指すものであり、表現方法についての指導はほとんど行わなかった。しかし、生徒の表現には変容が見られた。表現する相手を意識したことで、「書く」表現から、「読んでもらうために書く」表現に変わり、表現力が磨かれたと考えられる。よりよいコミュニケーションをとるには、相手意識を持つことが大事で、それがあってこそ表現力向上のための学習が生きると言えよう。

情報機器を使った交流では非言語による情報が欠けているため、それを補う対応が求められる。そこで、本研究では、情報機器を使った交流に対面交流を組み合わせたり、情報を吟味する時間を設けたりするとともに、情報モラル学習などの相手意識を持たせる働き掛けをした。その結果、発信記事の内容に言葉を大切にしようとする姿勢が感じられるようになった。さらに、資料16の調査結果からも分かるように、「人との接し方」全般においても相手意識の高まりが見られた。総合的な学習の時間の発表会でも、提示物を大きくしたり、語りかける口調だったりするなど、見る人、聞く人を意識した表れが多く見られた。交流に情報機器を効果的に使うことで、発信者としての自覚が育ち、発信するすべての情報に対する責任感が養われると考える。

(2) 今後の課題

本研究では、情報機器を使った地域住民や小学生との交流活動を通して「相手を意識して表現すること」を目指した。これを、対面時のコミュニケーションや情報機器を使った不特定な相手との交流に生かすには、本研究で取り上げた交流のような相手を意識させる実践的な学習の場を設けるとともに、学校全体での取組が重要になってくる。全職員が共通理解の基に、あらゆる場面において相手意識や目的意識を抱かせる働き掛けをし、情報モラル学習についても計画的、教科横断的に実施する必要があると考える。

情報機器を使って地域住民と交流するには、その地域性も影響すると考えられる。今後は、他校、他地域においても同様の実践をし、地域の状況に合わせた取組方法を模索していきたい。

注

- 1) 松村明編『大辞林』,三省堂,1988年,913ページ。
井上宏著『現代メディアとコミュニケーション』,世界思想社,1998年,20ページ。
- 2) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会『審議経過報告書』,2006年,8ページ。
- 3) 国立情報学研究所が、情報共有・eラーニングの基盤として開発したコンテンツ・マネジメント・システム(CMS)。
- 4) 文部科学省『情報教育の実践と学校の情報化～新「情報教育に関する手引」～』,2002年,24ページ。
- 5) 視察先:東北学院大学 稲垣忠助教授,仙台市教育センター,仙台市立将監東中学校。